

「城之越遺跡と伊賀上野城花見と芭蕉」

担当:井守徳弘

予定コース

近鉄学園前＝西大寺駅＝八木駅＝伊賀神戸駅＝城之越遺跡(200円)＝
比土駅＝上野市駅＝(買い物)＝上野城(昼食・花見)＝俳聖殿＝
芭蕉翁生家(300円)＝上野市駅＝伊賀神戸駅＝八木駅＝西大寺駅＝
近鉄学園前 (解散:5時ごろ、徒歩距離:約4km)

●城之越遺跡

遺跡は、上野市域最南部、周囲を低丘陵で囲まれた1.5km四方の小盆地の東端に所在する。遺跡の西方約700mのところを流れる木津川は、7kmほど北流して上野市市街地西端に達し、そこから山間部を西に向かい、笠置・山城地方へと続きます。

平成3年度に実施された、県営圃場整備事業に伴う発掘調査によって、古墳時代に築造された三か所に湧水源をもつ大形の溝(以下大溝という)とともにそれを取り込むように古墳時代から中世まで連続的に推移する竪穴住居跡群や掘立柱建物群が発見されました。

大溝は石組、貼石、立石で修景されており、出土遺物からみて祭祀の場として造られ使われたものである。また、竪穴住居跡は総数29棟以上、掘立柱建物跡は総数50棟以上が検出されました。

発掘調査の区域は、低丘陵の裾から北西になだらかに下る水田中の微高地であり、約13,000㎡の範囲です。

遺構の変遷は、まず古墳時代前期後半(4世紀後半)頃、竪穴住居が広く散在するとともに遺跡の北半部中央に大溝が素掘りの形で構築される。続いて大溝上流部に護岸の貼石や岬部分の立石、湧水部での石組が施される。この時期には、大溝以外には顕著な遺構がなく、大溝とそれに接続する広場状の空間は独立した祭祀の場として存在する。

次に5世紀に入ると、大溝での祭祀は継続するものの大溝自体は埋没し始め、周囲に竪穴住居や掘立柱建物が造られてゆく。古墳時代後期(6世紀)には、大溝の立石や貼石部にも埋没し祭祀の存在もわからなくなる。周囲では倉庫状建物を含む掘立柱建物が多くなってくる。

続いて奈良時代に入ると大溝は完全に埋没し、遺跡全体に掘立柱建物が建てられ、竪穴住居も造られる。大溝の上部埋土に「建」の墨書をもつ土器が入る。平安時代から中世にかけては建物が疎(まば)らになる

この遺跡の最大の特徴は、大溝の形態と性格である。

大溝はその上流端(南西側)においてそれぞれ12～3mの間隔で三か所の湧水をもち水源としている。うち西端の湧水部は素掘りの窪地状を呈しているが、中央と東端の湧水部には柵状の石組を設け、水の浄化と水量調節を行っている。中央と西端の湧水から、それぞれ幅2mほどの流路が形成される。合流点では岬状の地形を造成し、50cmほどの高さの石を立石状に組み込んでいる。両岸部には拳大の石を貼るようにまた小口積みのように詰め並

べている。この合流点から約15m下流において、東端の湧水からの流路と合流しここでも岬状の地形を造成している。この岬にはやや大型の石が集積しているが、もとは階段状の構造で水面に下りる施設と考えられる。

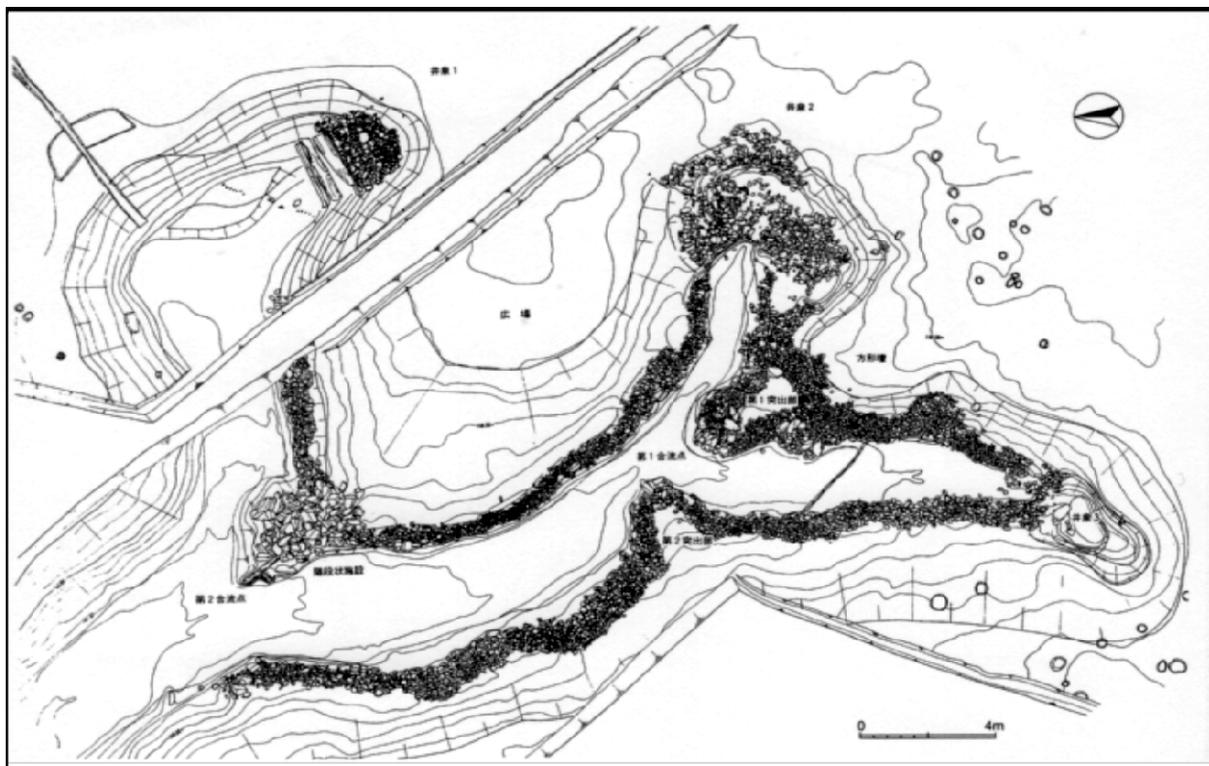
流路はここから一本で幅約5mの素掘り溝となり北西に流れる。検出された溝の長さは約50mであるが、溝は近畿日本鉄道伊賀線路敷を越えてなお続くことが判明している。岬や貼石護岸上方の台地状および広場状の一定の区域には建物などの遺構は存在しない。

遺物は主として大溝から検出されている。土器では、小型丸底壺(胴部穿孔付を含む)と高杯(内部朱彩付を含む)が多い。木製遺物では、日常品、建築部材のほか刀形、剣形、飾弓、案などが出土されている。これらのことから、大溝とこれに接する場所で祭祀が行われていたことは確実であり、かつ、祭祀関係の遺物がほとんど流路から検出され、湧水部自体からの出土品が僅少であり、湧水を清浄に保っていたことから、湧水自体を聖なるもの、聖なる地として祭祀が行われたと考えられる。

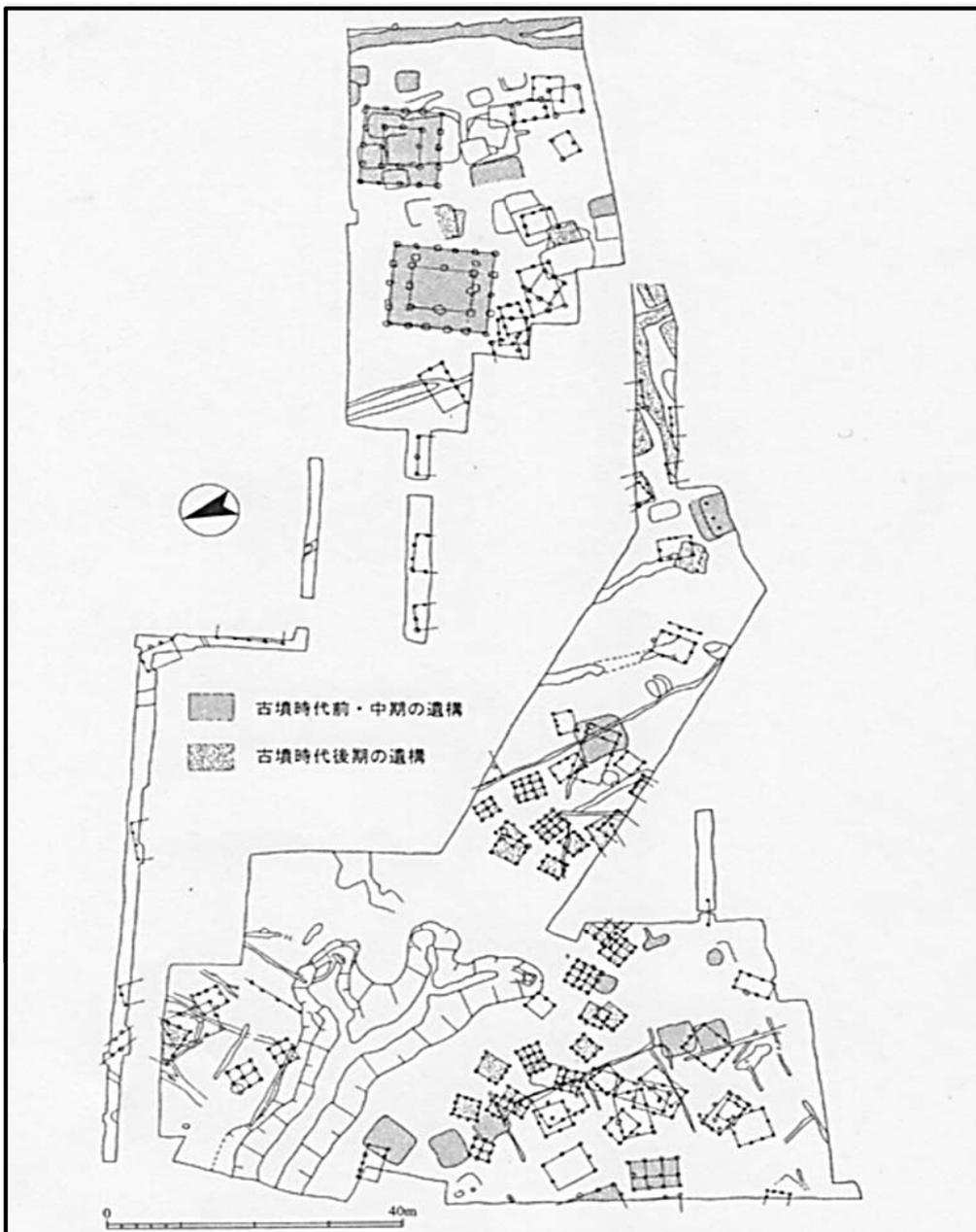
この遺跡を含む集落全体の構造はまだ把握されていないものの、古墳時代の集落における祭祀形態と明確な祭祀場の関係を知る上で類例の少ない貴重な史跡です。

さらに、この遺跡のうちの大溝とそれに接するある範囲の空間は、曲線を多用した流路、岬状の貼石などから、単なる水源や流路としての機能を越えたものと確認できる。そこには景観造形上の美意識とそれを表現する技術の存在が十分にうかがわれ、飛鳥時代以降に次第に形成されていく伝統的日本庭園の造形美と技術の系譜を考える上で庭園史上の価値が極めて高い。

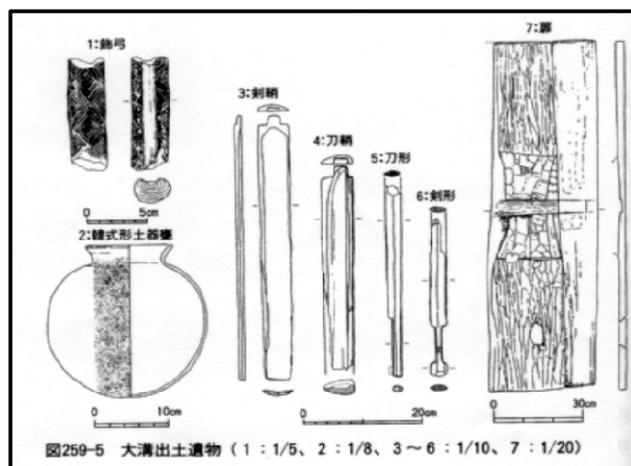
○城之越遺跡大溝祭祀遺構平面図



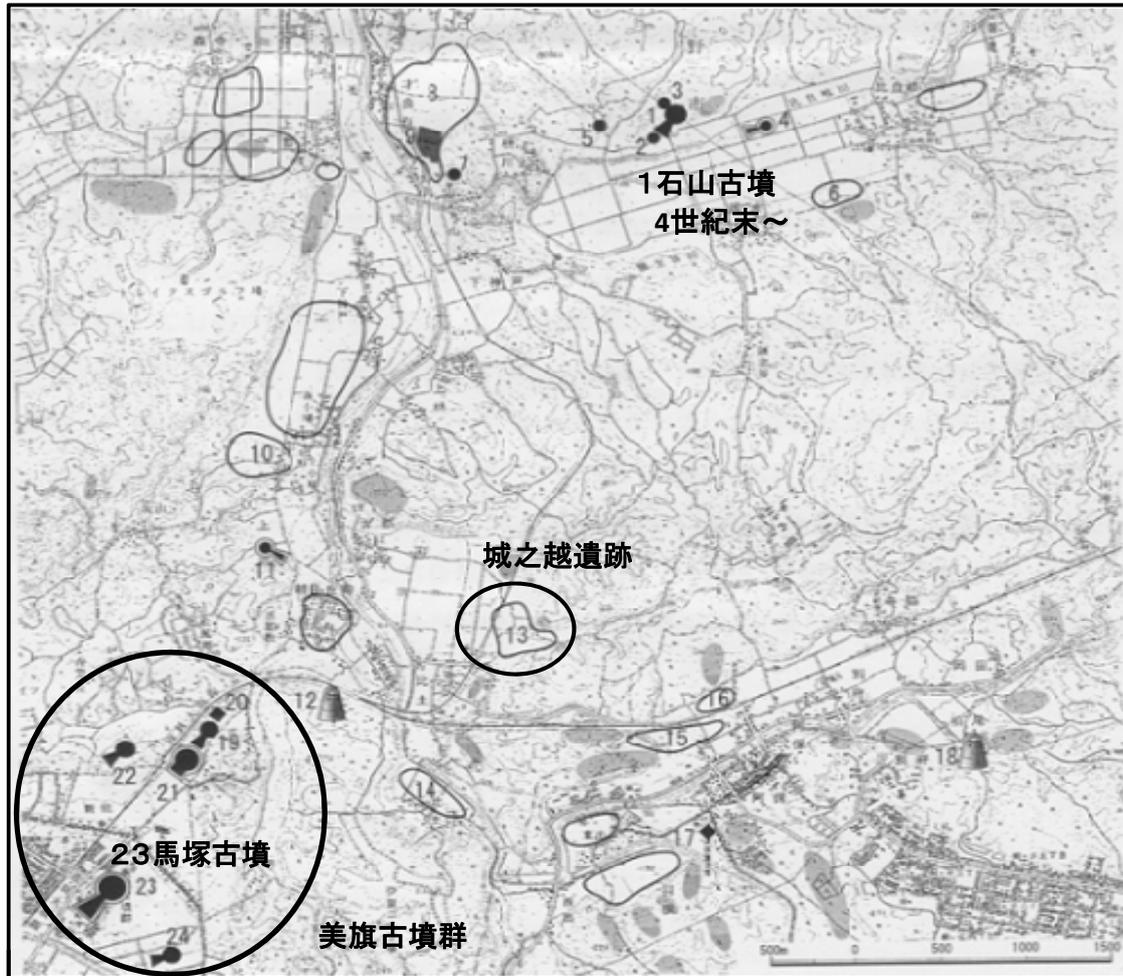
○遺構配置図



○大溝出土遺物



○城之越遺跡周辺の主要遺跡と古墳



石山古墳は全長120mの前方後円墳です。三重県内第3位の規模です。4世紀末～5世紀初頭では伊賀・伊勢を通して最大の規模の古墳です。

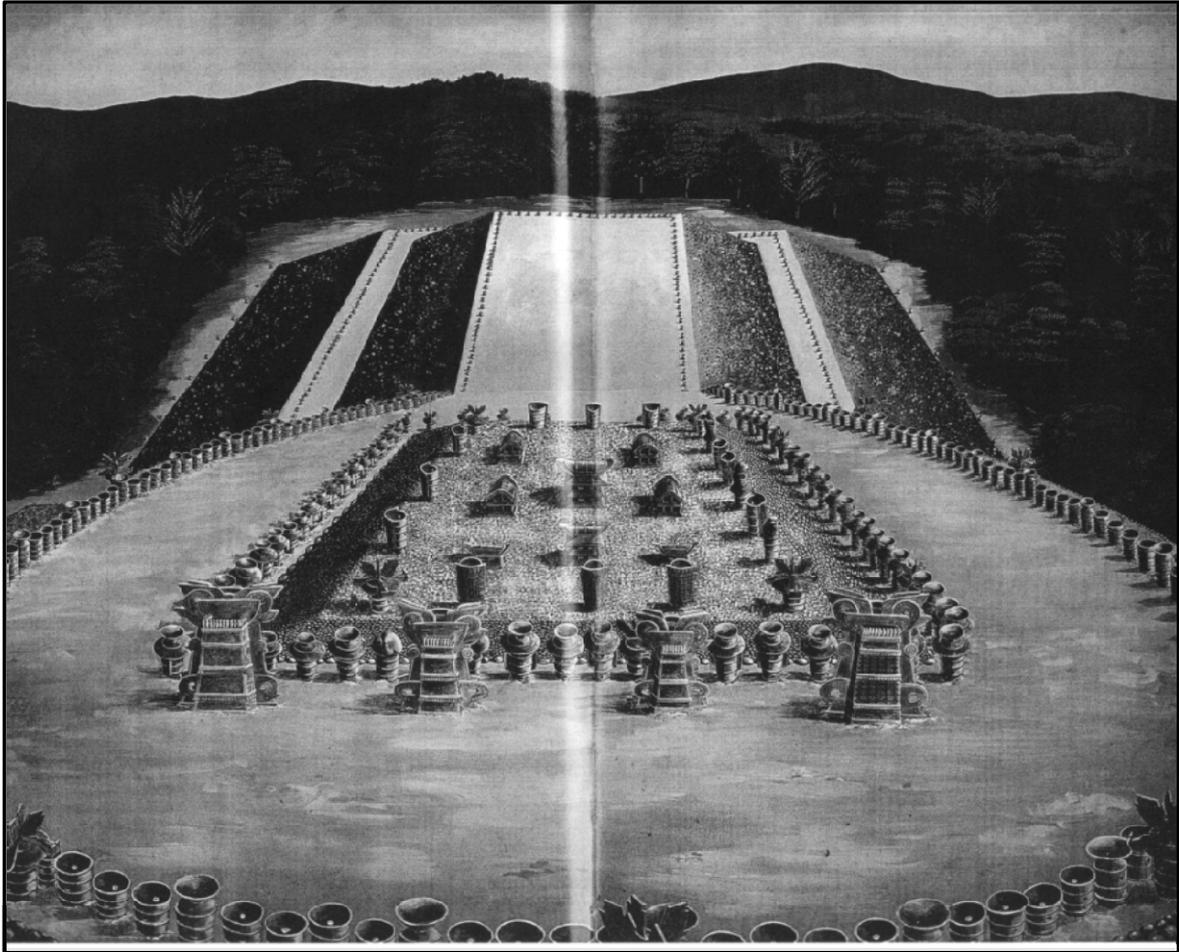
少し遅れて美旗古墳群が築造される。5世紀後半段階では三重県内第2位のきぼを誇る馬塚古墳がある。



御墓山古墳は城之越遺跡よりやや離れるが5世紀後半では三重県下第1位の古墳である。

これらの古墳から城之越遺跡で祭祀を行ったのは石山古墳に埋葬されている豪族(王)であり、その一族が 御墓山古墳と美旗古墳群の馬塚に埋葬された豪族(王)であろうと思います。

○石山古墳の埴輪列復元図



○石山古墳副葬品



●伊賀上野城

城のある丘は平清盛の発願によって建立された平楽寺という大寺院があり、西の丘陵には伊賀国守護仁木氏の館があった。

天正7年(1579年)9月、伊勢国の織田信雄(信長の二男)が8千兵を率いて伊賀平定に乗り出したが、伊賀衆の前に敗退し、天正9年(1581年)9月織田信長の援軍をうけ4万の兵で伊賀国を平定。織田信雄の付家老である滝川雄利を伊賀国守護とした。滝川雄利は大寺院、丸山城、滝川氏城を改修し伊賀国を支配した。

本能寺の変後豊臣政権となると、天正12年(1584年)10月脇坂安治(天正11年の賤ヶ岳の七本槍の1人)が伊賀国守護となったが、天正13年(1585年)5月に摂津国に移封されました。

○筒井氏の上野城

近世城郭として上野城が築かれたのは、天正13年(1585)8月大和郡山から移封されたのは、羽柴の姓を賜った筒井定次です。

天下統一を進める豊臣秀吉は、大坂城を中心とする大名配置を行い、大和郡山には、異父弟羽柴秀長をおいて大和・和泉・紀伊三ヶ国の大守としたので、郡山の定次はその外側を守る形で伊賀国への国替えとなったのである。定次は伊賀に移ると旧伊賀守護仁木氏の城館跡(後の西之丸の地)に仮館を建てて、平楽寺・薬師寺跡の高丘に新しく城を築きました。

城は高丘の頂上を本丸とし、東寄りに三層の天守閣を建造、本丸の東側丘陵とは堀切で区切り、西に二之丸、北の山下に三之丸を配し、三之丸の北谷口を大手としました。

慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いが起こると筒井定次は東軍の徳川家康方につき、会津征伐に参戦した。

関ヶ原の戦いの戦後、筒井定次は本領安堵、伊賀上野藩を立藩した。

しかし、徳川家康は大坂城を包囲する必要に迫られ、彦根城同様重要な地点である伊賀上野城を強固にすべく、徳川家康は筒井定次をかねてから不行状で、重臣に多く出奔され失策の多いのを理由に、慶長13年(1608)6月に領地没収され、鳥居忠正(陸奥国磐城平藩主)のもとに預けた。

一説には、筒井定次がキリシタン大名で棄教を聞き入れなかった為とも言われています。

○藤堂高虎の上野城

藤堂高虎(1556～1630)は近江国犬上郡藤堂村の地侍藤堂源助虎高の次男として生まれ、浅井長政、羽柴秀長、豊臣秀吉らに仕えたのち徳川家康について関ヶ原の戦いで戦功を立てた。

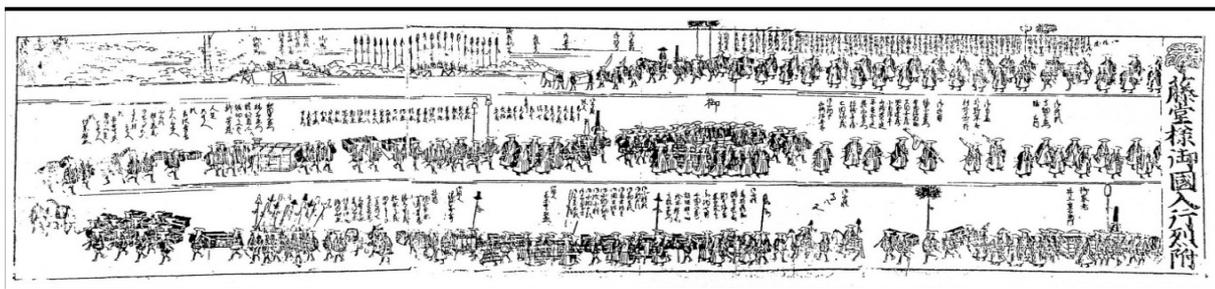
慶長13年(1608)8月、徳川家康は信任厚い藤堂高虎に、伊賀の国10萬石・伊勢の内10萬石、伊予の内2万石合わせて22萬石を与えた。

高虎が伊賀、伊勢に移封されたのは、家康の信任が厚かったのと、築城の名手でもあり、来るべく大坂との決戦に備えたもので、筒井定次の城は、大坂城の出城として大坂を守る形をとっていたのに対し、高虎の城は、大坂を攻撃するための城と全く逆の立場の城として、慶長16年(1611)正月、上野城を有事の根城として本丸を西に拡張、高さ約30mという高石垣をめぐらして南を大手としました。

建設中の五層の天守閣は、慶長17年(1612)9月2日、当地を襲った大暴風で倒壊したが、外郭には、10棟の櫓(二重櫓二棟、一重櫓八棟)と長さ21巻(約40m)という巨大な渡櫓(多聞)をのせた東西の両大手門や御殿などが建設されました。

慶長19年(1614)の大坂冬の陣、元和元年(1615)の夏の陣と家康方の勝利に終わり、幕府は諸大名に城普請を厳しく禁止したので、上野城の天守閣が再建されることがなく、一国一城制では上野城は伊賀の国の城として認められた。その後、10萬石の加増をうけて、32萬3千950石余の大藩として明治まで城代を置いて存続しました。

○藤堂様御国入行列附版画



○藤堂高虎像(重要文化財) 江戸時代 西蓮寺蔵

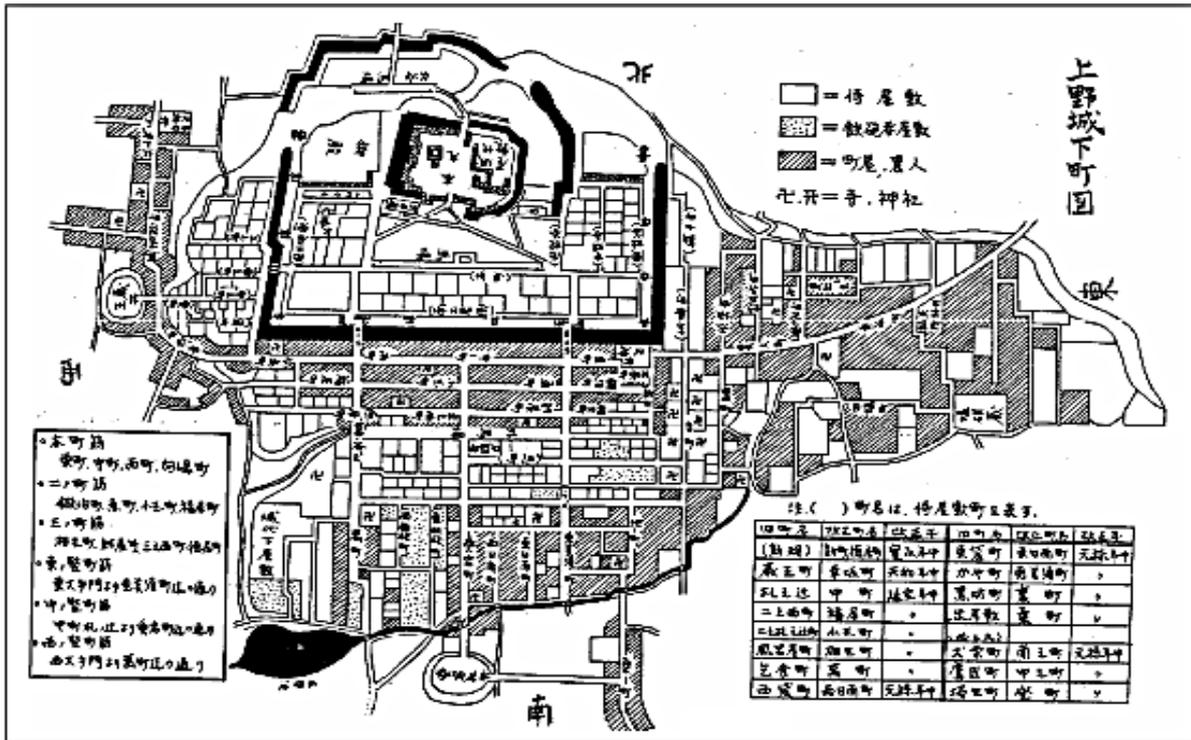


部分



本画像では、黒の袍(ほう)と冠を着け、太刀を佩びて笏(しゃく)を構え、水墨山水図を背に上畳に坐す老齡の姿が描かれています。画上には天台大僧正天海(天海は家康の参謀として朝廷との交渉等の役割を担う)の賛を記しています。

○上野城下町圖



「上野城と城下町 福井健二著」より

慶長13年(1608)に伊賀国に入部した藤堂高虎は上野城を築城するとともに、城の南側に城下町を開設した。城下町は外堀の南側に本町筋、二之町筋、三之町筋の東西の通りと東西の大手門から続く東之堅町筋、西之堅町筋とその中間の中之堅町を南北の通りを主要な通りとし、上野城の東側には町屋と武家家の混在した地区、西側には武家及び台地から一段さがった所に町屋を、南側に町屋・武家屋敷・町屋を交互に配している。

(6)

また、南東には寺院をかためて配した寺町がある。城下町は台地の縁辺にいちする上野城の外堀から南へ約1km、東へ約1.1kmの広がりを持ち、その範囲は東西約2.5km、南北約1kmである。

○近現在のの上野城

明治維新後、他の城と同様に伊賀上野城も石垣上の建造物の多くが取り壊されました。

昭和10年(1935)、衆議院議員であった川崎克の私財により模擬天守が建設されました。

川崎克は昭和17年(1942)には松尾芭蕉の生誕300年を記念し、同じく私財を投じて場内に俳聖殿を建立しています。

高石垣は黒沢明監督の映画「影武者」のロケにも使われました。

(8)

●俳聖殿

松尾芭蕉生誕300年を記念する建物。

昭和17年(1942)に、明治から昭和期の建築家伊東忠太(平安神宮・明治神宮共同設計・築地本願寺ほか)の設計指導で建設された。

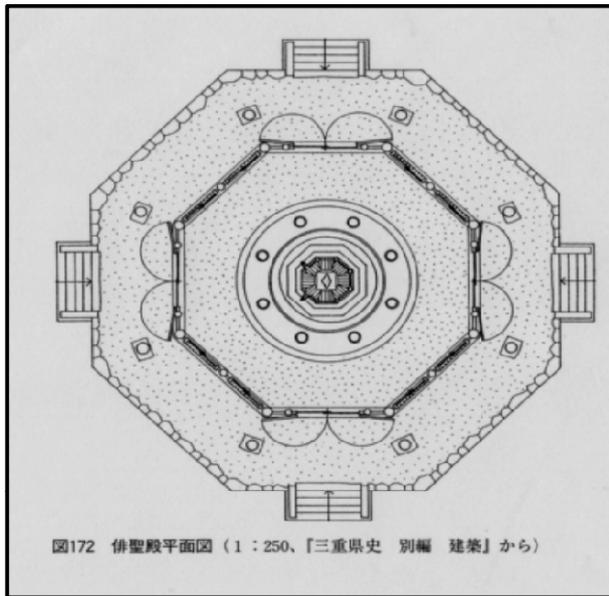
建設を主導したのは政治家川崎克でした。

内部は八角堂で、中央の八角厨子に芭蕉像を安置した。

川崎の説明では上層の屋根は芭蕉の笠、下層の屋根は蓑を着た肩から腰の姿、その下の堂は脚部にあたる。また、堂を取り囲む柱は杖とも脚とも見立てられるという。

棟梁は地元の森本源吉です。

堂内には彫刻家長谷川栄作の原型によって、川崎が手を入れ、自らの窯場で焼き上げた芭蕉坐像を祀った。



俳聖殿平面図



松尾芭蕉

●芭蕉生家

芭蕉生家は通りに面し、表は格子構えの古い町家で、玄関から奥まで通り土間となっています。

芭蕉は正保元年(1644)松尾与左衛門の次男として伊賀市で生まれました。

芭蕉生家は上野城下町の東北の出入口にあたり、町屋と下級武家屋敷、農家が混在しました。

この家は芭蕉の父松尾与左衛門が柘植から移住し、その後、芭蕉の兄半左衛門に受け継がれ、さらに明治のじだいまで代々、松尾家の住居となっていました。

芭蕉の生家とされるが、芭蕉の生誕地には他に伊賀町柘植の説もあります。敷地には主屋のほか、主屋の奥に土蔵と切妻造棧瓦葺の小建物があり、この小建物は芭蕉が郷里の伊賀に滞在中は利用した庵に擬せられ、整備されて釣月軒の庵号が掲げられている。

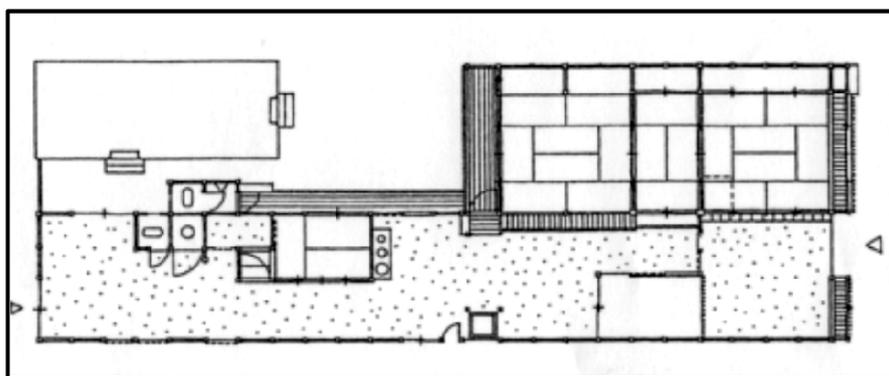
主屋は切妻造棧瓦葺、平入りの町屋の形式を持ち、北側に一列にミセ、ナカノマ、ザシキの三室を並べ、南側は通り土間とし、土間は中戸で前後に二分する。

土間は主屋の背後まで角屋となって長く延び、この角屋に三畳の小間・雪隠、風呂が設けられている。

ナカノマが四畳と小規模であることや、ザシキに床・棚・平書院や内法長押が備えられ、整った書院座敷となっていること、ナカノマとザシキの境には板欄間を入れることは、この家の特色となっている。

二階は表の奥行二間分をミセから梯子などで出入りする。奥とは土壁で仕切り、中戸の奥の通り土間の上部も大半を土間から昇降するようになっている。

建築年代は主屋、釣月軒ともに江戸時代末期と見られる。



芭蕉生家平面図

○芭蕉年譜

年号	西暦	歳	芭蕉年譜
正保元	1644	1	芭蕉生まれる。
明暦2	1656	13	父・与左衛門死去。
寛文2	1662	19	藤堂藩伊賀付侍大将の藤堂新七郎家に出仕。2歳年上の良忠(俳号蝉吟)に近習役として仕える。
寛文4	1664	21	江重頼編「佐夜中山集」に「松尾宗房」の名で発句2句が初入集。蝉吟の発句も1句入集。
寛文5	1665	22	蝉吟主催の貞徳翁十三回忌追善百韻に一座。
寛文6	1666	23	藤堂蝉吟死去により芭蕉の藤堂藩への仕官の道が途絶える。
寛文7	1667	24	北村季吟の子の湖春編「続山井」に「伊賀上野松尾宗房」として発句28句、付句3句入集。
寛文9	1669	26	荻野安静編「如意宝珠」(刊行は延宝2年)に「伊賀上野宗房」として発句6句入集。
寛文10	1670	27	吉田友次編「藪香物」に「伊賀上野宗房」として発句1句入集。
寛文12	1672	29	松尾宗房撰・三十番発句合「貝おほひ」成る。江戸に下る。
延宝2	1674	31	北村季吟から連歌俳諧の秘伝書「埋木」の伝授を受ける。
延宝3	1675	32	東下中の西山宗因を歓迎する画(大徳院の住職)邸興行百韻俳諧に一座。で初めて「桃青」と号す。

年号	西暦	歳	芭蕉年譜
延宝4	1676	33	伊賀上野に帰郷し、7月2日まで滞在。 甥の桃印を同道して江戸に帰る。
延宝5	1677	34	このころ、宗匠立机。 杉山杉風と両吟で百韻を興行。
延宝6	1678	35	信徳、素堂との三吟百韻を二巻興行。
延宝7	1679	36	岸本調和編「富士石」刊行。
延宝8	1680	37	「桃青門弟独吟二十歌仙」刊行。戸市中・小田原町から、杉風所有の深川の草庵に居を移す。
天和元	1681	38	門人の李下、芭蕉一株を贈る。 芭蕉の葉が見事に繁って名物となったことから、草庵を「芭蕉庵」の庵号で呼ぶようになり、俳号として「芭蕉」を使用するようになる。
天和2	1682	39	望月千春編「武蔵曲(むさしぶり)」（北村季吟序）に発句6句入集。この撰集で、初めて公に「芭蕉」号を使用する。 江戸駒込大円寺を火元とする大火で芭蕉庵類焼。
天和3	1683	40	秋元藩家老・高山伝右衛門繁文(麩峙)の招きで甲斐の谷村に逗留。甲斐から江戸に戻る。 其角編「虚栗」刊行。発句13句、漢句1句、歌仙3入集。 母死去。総勢52名の寄進者を得、冬、新築の第二次芭蕉庵に入る。
貞享元	1684	41	門人千里とともに「野ざらし紀行」の旅に出る。 故郷、伊賀上野に向かって旅立つ。前年に亡くなった母の墓参を兼ねての旅。 「野ざらし紀行」の旅中、名古屋にて、「冬の日」五歌仙・追加の表六句成る。
貞享2	1685	42	「野ざらし紀行」の旅から帰る。
貞享3	1686	43	芭蕉庵で蛙の二十番句合を興行。 荷兮(かけい)編「春の日」刊行。「古池や蛙飛び込む水の音」など発句三句入集。芭蕉七部集の一つ。
貞享4	1687	44	月見と鹿島神宮参詣を兼ねて、曾良と宗波を伴い鹿島へ旅立つ。「鹿島紀行(鹿島詣)」成立。 「笈の小文」の旅に出る。 江戸の芭蕉庵から、鳴海、豊橋、渥美半島、伊良湖崎、熱田神宮、伊賀上野(越年)、伊勢、吉野、高野山、和歌浦、奈良、大阪と巡り、須磨、明石を訪れ、須磨に一宿したところまでの紀行が「笈の小文」としてまとめられている。
貞享5	1688	45	仲秋の名月を見るため、蕉門越人(えつじん)とともに岐阜から信濃国の更科へ旅立つ。
元禄2	1689	46	第二次芭蕉庵を手放し、杉風の別荘「採茶庵」に居を移す。 荷兮編「あら野(曠野)」、京の井筒屋から刊行。

年号	西暦	歳	芭蕉年譜
			芭蕉七部集の一つ。
元禄2	1689	46	曾良同道で「おくのほそ道」の旅に出立 京都滞在中、去来に「不易流行」の理念を説く。
元禄3	1690	47	珍碩編「ひさご」、京の井筒屋から刊行。題簽は「飛 さご」。越人序。芭蕉七部集の一つ。 義仲寺在住。「幻住庵記」成る。
元禄4	1691	48	向井去来の草庵の京都・落柿舎に入り、5月4日ま で滞在。去来・凡兆編、芭蕉監修「猿蓑」刊行。芭 蕉七部集の一つ。
元禄5	1692	49	第三次芭蕉庵完成。日本橋橋町から深川へ。 「芭蕉を移す詞」所収の「芭蕉庵三ヶ月日記」成る。
元禄6	1693	50	甥の桃印、芭蕉庵で逝去。
元禄7	1694	51	「おくのほそ道」素龍清書本成る。 帰郷のため寿貞の子二郎兵衛を伴い江戸を発つ。 野坡・利牛・孤屋編「炭俵」、京の井筒屋から刊行。 芭蕉七部集の一つ。 7月中旬、伊賀上野で「続猿蓑」撰に従事。 9月29日夜、下痢で床に臥す。この日を境に次第 に容態悪化。 10月8日夜更けに、病中吟を示す。 「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」 10月10日晚方から様態急変。 10月12日申の刻(午後4時ごろ)死去。 10月14日遺言により義仲寺(滋賀県大津市膳所駅 近く)に埋葬する。

参考文献

伊勢・伊賀の古墳と古代社会 八賀晋 2010 (株)同成社
 石山古墳 三重県埋蔵文化財センター 平成17年 三重県埋蔵文化財センター
 三重県史 資料編 考古1 三重県 平成17年 三重県
 上野市史 考古編 伊賀市 平成17年 伊賀市
 上野市史 文化財編 伊賀市 平成16年 上野市
 芭蕉年譜大成 今栄蔵 1994 角川書店
 芭蕉全伝 山崎藤吉 1942 建設社出版部
 俳人芭蕉伝 加藤紫舟 昭和9年 天来書房
 故郷塚の由来 愛染院パンフ
 城之越遺跡 伊賀市 財団法人伊賀市文化都市協会パンフ
 ウィキペディア